# ことのは

熊本県立大学文学部日本語日本文学科だより

## 「国語」の、その先へ。

CONTENTS


1. はじめに
2. 「日文」で学ぶ4年間
3. 研究力を社会で磨く 社会に活かす
4. 多彩な教員陣
5. 卒業生だより


※日文科ホームページは
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~nichibun/


熊本県立大学
〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL096-383-2929(代) FAX096-384-6765

# はじめに

学科長　大島　明秀

日本語日本文学科は、今昔の「日本語」を手掛かりに人間とその営為を探求する学科であり、4年間でその方法を伝達するとともに、論理性・思考力・判断力を育みます。

ところで、私たちが修める人文系（文系）学問の社会的意義とは一体何でしょうか。

人文系学問の本質は、つまるところ他者との対話だと言えます。先賢や同輩・後生の言葉に向き合い、多様な言葉や発想や経験を自分のものとする人文系学問にこそ、自己を表現し、他者を理解し、未来を想像し、新しい社会を構想する手掛かりが詰まっているのです。

しかし、言葉や文学や思想や歴史を広く学び、深く考え、新しい発見にまで至ったとしても、その獲得した知見を自身の趣味世界内に閉じていては他者には伝わりません。また、書物に耽溺して社会に背を向ける態度では、自身や自身の信じ愛するものの存在意義が世間に認められることはないでしょう。

したがって本学科では、社会の一員であるとの自覚を持ち、古今東西の書物を愛しつつ現実の社会問題と向き合い、幅広い視野と好奇心を持って未知の世界に飛び込むような、学問世界にとどまらず社会に向けて習得した人文学的見識を表現・発信する人の育成を目指しています。

## さらに その先を目指す方へ
## ―大学院の指導体制―

私たちの日本語日本文学科は、「熊本県立大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻」という、博士前期（修士）課程から博士後期（博士）課程に至る大学院（研究科）を擁しています。各々の研究分野で活躍する教員の指導のもと、この九州の地から新たな研究成果を世に問うていきませんか。

学部において一定以上の成績を収めていれば大学院進学時の入学金が免除になるほか、学会発表を行う際に支援金の補助を得られるなど、各種のサポート体制が整っています。

# 「日文（ニチブン）」で学ぶ4年間

## 主な専門科目とカリキュラムの流れ

学科の授業は、下級生向けには、基本的なもの、広い範囲を扱う「概論」や「基
「演習」や「特殊研究」が多く配置されています。

「概論」や「基礎論」などで基本的な知識や方法論を身に付け、次に「演習」を積み、さらに「特殊研究」において教員の専門とする分野の細かい指導を受

**入 学**

| | ● 基礎的科目 | ● 展開的科目 |
|---|---|---|
| 基幹的分野 | 日本語学概論<br>方言学基礎論<br>文献学基礎論<br>古典文学史<br>文学研究法基礎<br>近代文学史<br>地域踏査演習<br>日本語教授法<br>古代文学講読<br>近代文学講読 | 日本文法<br>日本語史<br>日本語学史<br>中世文学講読<br>近世文学講読<br>現代日本語の分析<br>地域文献講読<br>古典文化研究<br>言語文化研究<br>近代文化研究<br>地域文化研究<br>日本文化論 |
| 関連分野 | 歴史基礎論<br>言語基礎論<br>知識と方法<br>文学研究への招待 | 歴史学講義<br>中国文化論<br>中国文学史<br>日中比較文学<br>異文化コミュニケーション論　など<br>情報学実習<br>比較文学講義<br>心理学講義 |

## 5つの卒業履習分野

日本語もしくは、日本の文学作品の研究が基本となりますが、各自の関心や比重の置き方によって卒業論文の作成に当っては、5つの分野の中から自分にあったものを選んで論文を書きます。

日本語の特質、
歴史などを研究したい→**日本語学**

日本の文学作品、
その背景などを研究したい→**日本文学**

外国人に日本語を教えるための
技術を研究したい→**日本語教育学**

地域の言語や文学・歴史などを
重点的に研究したい→**地域文化**

中国文化、歴史学、日本文化、
異文化コミュニケーションなど、
様々な隣接分野と
関連づけて研究したい→**人文学**

礎論」、上級生向けには、特殊な問題を深く掘り下げる

において研究対象を深く掘り下げて考える実践的訓練けながら卒業論文を作成する、という手順です。

＊注意
下記の図は科目の種別による大まかな見取り図を示したもので、各学年の配当年次には対応していません。正確なカリキュラム表は大学案内などを御参照ください。

卒 業

● 演習

日本語学演習Ⅰ～Ⅲ　中世文学演習
日本語学演習Ⅳ～Ⅵ　近世文学演習
日本語学演習Ⅶ～Ⅸ　近代文学演習
古代文学演習　日本語教育演習
日本文学演習

複合演習

歴史学演習　言語学演習
中国文化論演習　比較文学演習
心理学演習　日本文化論演習
異文化コミュニケーション演習　など

● 特殊研究

日本語学特殊研究ⅠⅡ　中世文学特殊研究
日本語学特殊研究ⅢⅣ　近世文学特殊研究
日本語学特殊研究ⅤⅥ　近代文学特殊研究
古代文学特殊研究　日本語教育特殊研究

歴史学特殊研究
中国文化論特殊研究
日本文化論特殊研究
異文化コミュニケーション特殊研究 など

卒業論文

卒業論文発表会

## 多彩な「演習」

本学科の「目玉」とも言える演習。一つの文献を定め、その一言一句にこだわって精読したり、海外での日本語教育実習を通して実践的な技術を磨いたり。演習の主役は学生です。これまで開講された演習の一端を紹介しましょう。

### 日本語学・日本語教育

○文法研究の手法
○仏教説話集『沙石集』の語学的分析
○フィールドワークによる言語調査
○韓国・インドネシア等での日本語教育実習

### 日本文学

○『万葉集』精読
○室町の注釈で百人一首を読む
○『西鶴諸国ばなし』精読
○芥川龍之介初期作品精読
○球磨の俳人 井上微笑の新出資料解読

### 人文学・地域文化

○中国志怪小説『夷堅志』読解
○江戸時代に編纂された名将伝の読解
○明治期編写『琉球語』の編纂過程
○天草市上田資料館所蔵典籍・文書の調査
○坪内逍遙『我が国の史劇』輪読

## ゴールとしての「卒論」

学生のゴールは卒業論文(卒論)です。関心がある分野の「特殊研究」において教員の指導を受けつつ 400 字詰原稿用紙にして 50 枚前後(約２万字)の論文を執筆します。論文を書くとは、オリジナルの知見や分析を元に新たな学説を立てることです。完成まで、それまでに得た知識・調査手法・プレゼンテーション能力を総動員する厳しい日々が続きます。最近の卒論タイトルをいくつか紹介しましょう。

### 日本語学・日本語教育

○徳冨蘆花『不如帰』内連体助詞「が」の特殊性
○近世における「フビン」の意味・用法について
○日韓動画コンテンツにおけるテロップの付け方とコミュニケーションスタイル
○添加の接続詞「そして、それから」の用法について

### 日本文学

○『源氏物語』の六条院崩壊と「冬の町」—明石の御方の異界性を契機として—
○古代、中世における「人魂」観
○『雨月物語』「目ひとつの神」論
○夏目漱石『こころ』における「明治の精神」とは何か
○宮沢賢治「十力の金剛石」論

### 人文学

○唐以前の中国における桃の受容について
○〈黒船〉言説の誕生
○山東京伝『化物和本草』考—陳列される化物—
○『東京朝日新聞』記事における松井須磨子像

# 研究力を社会で磨く 社会に活かす

**机に向かって本を読むことだけが、大学の勉強ではありません。**
**地域との積極的なかかわりの中で、「生きた知識」の構築を目指します。**

熊本博物館での和本調査

## ●地域委託研究
## ――菊池市の和本調査など

日文科では地域連携活動を重視しており、多くの研究室が様々なフィールドに出かけています。ここではその一つ、平成 24 年度から現在に至るまで歴史学研究室が取り組んでいる菊池市での史資料調査を紹介します。

平成 24 年度に着手した和本調査では、現場で埋もれた 1,176 冊の江戸・明治期の和漢籍を発掘し、まず学生とともに書誌（本の情報）を取りました。次に和紙の栞を用いて仮番号を各冊に付し、最後に中性紙でできた箱に収める、といった整理作業を行い、本の出納を可能にする体制を整えました。これらの書物は平成 29 年 11 月に開館した生涯学習センター内の古文書室に収められ、現在は市民が閲覧できる状況になっています。

なお、『菊池市生涯学習センター蔵和漢籍分類目録』（平成 30 年 3 月）に書誌採録の成果をまとめ、和漢籍の全貌を学問的に明らかにしました。また、この活動は社会的にも認められ、たびたび報道されました（『熊本日日新聞』平成 26 年 1 月 5 日、平成 30 年 1 月 21 日掲載）。

和本整理が終わった後は、菊池市の民家で発見した幕末頃製の地球儀の分析に取り掛かり、X 線 CT スキャナによる断層撮影と書誌学的手法を用いて、地球儀の構造と造形技法、球面上の世界図の基図を追究しました。『菊池市石淵家蔵地球儀の総合的研究―構造･造形技法･世界図―』（菊池市教育委員会、令和 4 年 3 月）にまとめた研究成果は、学界のみならず社会的にも注目を浴びました（『熊本日日新聞』平成 27 年 8 月 13 日、平成 30 年 1 月 21 日、令和 4 年 5 月 2 日掲載）。

現在は天地元水神社の神主で学者でもあった渋江家の史資料を学生とともに整理し、研究を進めています。

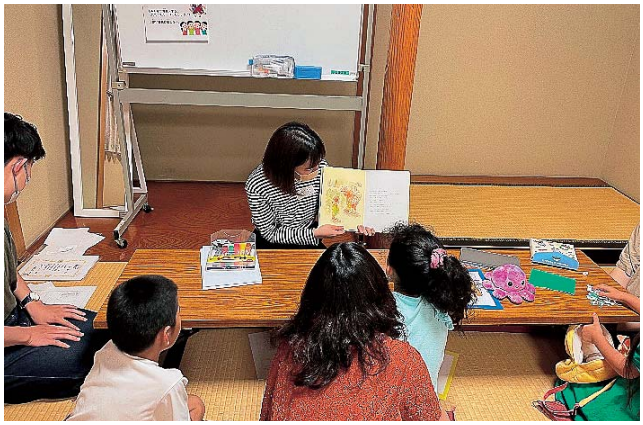
その他、日本文学研究室、日本語学研究室、日本語教育研究室、日本思想史研究室でも、それぞれ水俣市、八代市、人吉市、天草市、小国町などで調査・研究を行っています。年度によっては「複合演習」という授業で熊本博物館が所蔵する和本整理に当たることもあり、積極的な学生は 2 つ 3 つと掛け持ちして、他では味わえないような学生生活を満喫しています。

演習における方言調査

菊池市での和本調査

## ●地域の日本語教室「おるがったキッズ」

「おるがったキッズ」は外国にルーツのある子ども（5 歳～8 歳）を対象とした地域の日本語教室です。この教室は熊本県立大学、NPO 法人外国から来た子ども支援ネットくまもと、熊本市国際交流振興事業団、熊本保健科学大学が共同で運営しており、本学からは教員と学生（日本語教員養成課程の受講者）が活動の一部を担当しています。



# 多彩な教員陣

**日本語日本文学系では西日本屈指の充実した教員数を誇るわが日文。**
**各教員の研究室を覗いてみましょう。**

## 日本語学（語彙史・文字史及び辞書史研究）

### 研究者水準の洞察力を

**米谷　隆史**（Takashi Yoneya）

ことばの力を感じることは濃淡こそあれ誰でもできますが、その「感じ」が何故にもたらされるのかを考えて説明するには修行が必要です。残念ながら、お金を払ってまでその修行を積もうとする人はあなたを含めて世の一握り。さらにこの一握りは、実際の働き口が何であれ、今と将来のことばに少しだけ強い責任感を持つことが求められる損な役回りです。

努力して博士号まで取得しても、それに見合った就職先は存外に少ないとの状況がよく報道されます。これに加えて少子化・大学の淘汰まで叫ばれる時代に、九州の真ん中の地方大学が博士課程までを擁して研究者を養成（しかも文学・語学研究で！）するようなカリキュラムを維持しているのはあらゆる面で無駄だという声がどこかから聞こえてきそうです。しかし、一握りが一すじになっても良いのでしょうか。世の中の正邪や好悪の「感じ」は多くことばに乗ってやってきます。日文の洞察力を身につけた皆さんが力を発揮するのは、大好きなことばや物語を分析する時だけではないと信じています。

授業風景（日本語学概論Ⅰ）

## 日本語学（方言学、社会言語学）

### ことばに潜む規則性

**小川　晋史**（Shinji Ogawa）

ことばには決まりや約束ごとがあります。それがあるからこそ会話が成り立つのですし、自分の知らないことばについては、その決まりを知らないからこそ理解したり使ったりすることができません。ことばの中でも主に現代日本語を扱うわけですが、一口に日本語と言っても様々で、いわゆる標準語と方言では異なった決まりがあったりします。そのような決まりや法則性を探ってみるのはとても面白いことです。例えば、ドアを閉める音を表すのに「バタン」と「パタン」では前者のほうが荒々しい閉め方をした印象を持ちます（『音象徴』と呼ばれる分野）。九州の多くの方言で、質問するときに「今日、来ると？」とは言っても、「これ、ラーメンと？」と言うのには抵抗を持つ人が多いです（方言における疑問の「と」の使い方）。日本語を使うとき、知らず知らずのうちに何らかの決まりにしたがっているわけです。このような、ことばに関する決まりに興味を持って、解き明かしてみたいと思う学生さんは是非お越しください。

## 日本語教育

人事選考中

令和８年４月 着任見込み

# 多彩な教員陣

## 中世文学

### 文献を通して人間の深みへ

**鈴木　元**（Hajime Suzuki）

もっぱら鎌倉期以降の古典学を専門としています。古典の研究とは、ごく簡単に述べるならば、江戸時代以前の文献を掘り起こし、書物としての状態を調べ内容を読み解き、史的にそれを位置づける作業といえましょう。もちろん、その文献の中心には文芸テキストが位置を占めています。

かつては、文学とは極めて私的な営みとして、大学の教育においても研究においても、「楽しければそれでよい」と素朴に考えられてきました。学問の探究とは知的欲求に萌すものであるという前提からすれば、出発点はそれでよいかもしれません。しかし、それで終わっていては無用の烙印を押され、いずれ公教育の場から退場を余儀なくされるでしょう。文学を通して、あるいは古典を介して何をめざすのか、我々は日々考え続けなければなりません。それこそが、人間探究の学の、現代における存在意義だと思っています。

## 古代文学

### ほんとうの探求力

**岩田　芳子**（Yoshiko Iwata）

奈良・平安時代以前の文学を専門としています。現代を生きる我々が、千年以上も前の文学作品を読んで、感動したり、理解できたりするのは、ことばを媒介として、感覚を共有できるからです。もちろん、ことばは、流動的な側面をもちますから、長い年月を経る間に、変化するものも存在します。そうしたことばや表現の数々を、丁寧に読み解いて、古代の人々に近接して行きます。

また、作品の背後には、歴史・民俗・信仰など、当時の生活の営みが、豊かに広がっていて、それらは、文学の内容とも、大きく関わります。でも、文学と諸現象とを、単なるイメージで恣意的に結びつけるのでは、学問にはなりません。目には見えないけれど、確かに存在するものも、世の中にはたくさんあります。そうした事柄や事象を、自身のことばによって、論理的に説明して行かなければなりません。読む立場と、自身の考えを伝える立場、両方の側面から、ほんとうの探求力を身につけることを、みなさんと目指したいと思います。

## 近代文学

### このクラスに解釈はありますか

**五島　慶一**（Keiichi Goto）

芥川龍之介を中心に日本近代文学の研究・授業を行っています。近代文学で一般に最も重要と考えられるのは作品の解釈です。解釈とは？　小説から作者の意図を見出すこと？　未だにそう考えているのであれば、あなたは文学の面白さの半分も理解していないことになります。解釈とは、自分なりオリジナルの〈読み〉を提示することです。作品に書かれている事柄から、またさまざまな周辺材料を集めつつ、作品を自分なりに意味づけ、それを論理的筋道でもって再構成して示す――研究ではそれを「論」と呼びます。論を立てるのは自分と作品との一対一の真剣勝負であり、同時にそれは観客（読み手）を意識した試合でもあります。優れた論は、時にその対象となった作品以上に面白い読みものとなりえます。私の研究室では、各自が選択した対象（作品）に対して独自かつ説得的な解釈を見出すべく、多くの先輩たちが日々楽しげに頭を悩ませています。「楽しく悩む」？　その一員になればあなたにもわかりますよ。

## 近世文学

### 近世文学の魅力

**真島　望**（Nozomu Mashima）

近世は出版文化が花開いた時代です。これは一大転換で、それまで一部の権力者や宗教組織に独占されていた文学が、広く一般に開放されることになったのです。

一例を挙げるならば、近世初期の『仁勢物語』（仮名草子）という作品が象徴的です。その書名からおわかりの通り、平安文学を代表する『伊勢物語』を逐一もじったパロディ作品です。その内容は、あの雅やかな王朝文学の世界を、江戸時代の庶民の卑俗な生活・文化に置き換えたもので、下ネタも満載のかなりきわどいものですが、当然のことながら、『伊勢物語』そのものに通じていなければ、その落差によるユーモアを理解することは不可能です。

その背景には出版を通じて『伊勢物語』が広く流布し、それによる古典研究も進捗した事実が存在します。古典を享受し咀嚼していくことの積み重ねがあったからこそ、当時の「現代文学」が誕生するわけですから、やはり出版の影響は大きいのです。

「いにしへ」を描いた古典と同様に「いま」を描くことに積極的な意味を見出したのが近世という時代です。当時の人々がいかなる問題意識をもって「いま」を見つめていたのか。学生諸君とともに考えていきたいと思います。

## 歴史学

### 江戸に今を見る

**大島　明秀**（Akihide Oshima）

「歴史」を知るということは、いかなる営みなのでしょうか。

一つの答えとして、「過去」という鏡をもって「現在」を見つめ、そして「未来」を構築するための取り組みだと言えるでしょう。また別の角度からは、歴史はあくまで人間の手になる〈物語〉で、「歴史の描き方」にはその時々の〈現在〉のアイデンティティが投影されるものとも見ることができるでしょう。

私は過去に対する飽くなき関心と、現在への強い問題意識から歴史学を研究しています。専門領域は近世（江戸時代）ですが、ゼミでは、日本文学や日本語学と関連するテーマであることを前提としますが、江戸時代だけでなく、明治以降、さらには日本とヨーロッパの交流を対象とする方も歓迎しています。また、菊池市をはじめとして、各地域に眠る江戸時代の古文書や和本を整理したり、その技術を身に付けるための古文書講座を開催したりもしています。一人でも多くの学生が、実物と触れ合いながらアクションする歴史学に参加してくれることを願っています。

## 中国思想史

### 中国の文字と文化の世界

**山田　俊**（Takashi Yamada）

文学部日本語日本文学科の山田俊です。中国の三教思想交流を研究しています。三教とは儒教・仏教・道教を指し、この三教はそれぞれの時代の状況に応じて互いに影響し、競争し合いながら発展し、今日に至る中国の思想・文化を形成しています。その歴史を古典文献を正確に読み解くことで解き明かすことを目指しています。また、この三教思想交流は中国古典文学にも大きな影響を与えてきました。大学の授業では六朝志怪小説、唐宋伝奇小説などの、中国の古典小説を学生と一緒に読解し、また、それらの日本文学・文化との関わり等の観点から卒論の指導を行っています。

中国の古典思想・文学・文化、そしてその日本との関わりに関心のある方が本研究室に来られることをお待ちしています。

## 日本芸能文化論

### 剣劇研究への招待

**羽鳥　隆英**（Takafusa Hatori）

早稲田大学や新潟大学を経、2021年４月に熊本県立大学に着任しました。専門は日本芸能論、特に剣劇研究です。2020年にアニメ映画版が興収記録を樹立した『鬼滅の刃』、2021年に実写映画版が完結した『るろうに剣心』、熊本にも由縁の剣豪・宮本武蔵が主人公の『バガボンド』などの人気が例証する通り、私達の身の回りには現在、刀剣の闘争に身を投じた人間の物語＝剣劇の流行が見られるようです。2019年に歌舞伎版が初演された『風の谷のナウシカ』も帯剣した「姫」の物語でした。私達は何故に刀剣の闘争に惹かれるのか？簡単に結論は出ませんが、一緒に試行錯誤し得れば幸甚です。

## ○教員の近著紹介

①**大島明秀［著］**『蘭学の九州』弦書房（2022）
オランダ人やオランダ語を通じて江戸時代の日本にもたらされた西洋の学術「蘭学」について、その最重要拠点であった九州に視座を据えて歴史的展開を描いた。

②**小川晋史［編著］**『琉球のことばの書き方―琉球諸語統一的表記法』くろしお出版（2015）
北は奄美から南は八重山まで、汎用的な表記法の定まっていない琉球諸語について、複数研究者の協力により新たな表記法の提案を行うとともに、個別方言の表記例を示す。

③**羽鳥隆英［著］**『日本映画の大衆的想像力―《幕末》と《股旅》の相関史』雄山閣（2016）
近代日本の起点に位置する幕末＝明治維新を、映画や演劇などの芸能が如何に表象したかについて、メロドラマ研究の《善悪》《悲哀》の概念を援用しつつ検討する。

④**山田俊［著］**『金朝道家道教の諸相』汲古書院（2022）
従来、中国の金朝の道家道教は金末から元朝にかけて生じた新興道教のみが論じられてきたが、本著は金朝の比較的早い時期に着目し、北宋からの継承も視野に入れ、宋・金・元三朝の道家道教の動向の諸相を分析する。

# 卒業生だより

**本学科そしてその大学院は、優れた教育・研究者養成機関として
これまで多くの卒業生を生みだしてきました。ここではそのうちの４名を御紹介します。**

## 亀井　梓

私は日本語日本文学科を卒業後、一度就職し、その後大学院へと進学しました。学生時代は文学作品を当時の時代背景や、様々な事柄を考慮したうえで読み解く経験を積みました。

現在は市の事務職員として働いています。市役所では、市民の方の相談や申請に応じたり、新たな制度等の周知を行ったりしています。

一見、これらの仕事と日文での学びは繋がりが薄いように見えます。

しかしながら、日文で得た力を仕事で使わない日はありません。その力とは「他者の言葉を受け止め、その意味を考えた上で自分の考えを伝える力」です。この力は汎用的であるが故に目立つものではありませんが、様々な人と接する際には必要不可欠なものです。

何故この人は、このような表現をするのか。それに対して何かしらの背景があるのか。どのように伝えれば、こちらの伝えたいことを正確に伝えることができるのだろうか。今でもこのようなことを日々考え続けています。

そしてこのように「ことば」と真摯に向き合う中で、日々新たな気付きがあることを何より楽しく感じています。皆さんも「ことば」と真摯に向き合い、自身の世界を広げてみませんか？

（八代市職員、2014 年度卒・2022 年度博士前期課程修了）

## 北岡　桐子

私は大学生活の４年間で、学ぶ方法とチャンスを与えて頂きました。韓国に交換留学をした１年間はその最たるものです。「外国人」として暮らすことは、異文化と異言語の２つの孤独を味わうことでもありましたが、その経験が他者への配慮や自己表現能力を向上させる端緒となりました。表現することについて、ここまで時間を掛けて追及することができたのは留学というチャンスを与えて頂けたお陰だと思っています。また、テキストの読解、調査、検証の力は授業や演習を通して磨かれていきました。

現在、私は、銀行員として働いています。業務の中では、大学で身に付けたテキストへのアプローチや表現力、他者への想像力など様々な事が役に立っています。

今、皆さんが学んでいることが何の役に立つのかすぐには分からないかも知れません。しかし、物事に真っ向から取り組むことで自ずと答が導き出される時がきます。その時まで焦らず地道に学びながら、それぞれの花を咲かせてほしいと思います。

（肥後銀行勤務、2017 年度卒）

## 藤田　航輝

私は日本語日本文学科で日本語教育を専攻し、現在は日本語の講師として働いています。日文に在籍していた頃は、日本語に関する基本的な知識や理論を学ぶだけでなく、教育実習や短期交流プログラムなど実践の機会にも恵まれ、学びの中にも楽しさを見出すことができました。当時の私は周囲の友人が就職活動に精を出す中、自身の進路については漠然とした考えしか持っていませんでした。当然、数年後にこうなるなどとは夢にも思っていませんでしたが、最終的に大学院への進学を決意したのは、４年間毎日のように「ことば」について考える中で、もっと知りたいという思いが芽生えたからです。結果として、日文での日々があったからこそ今の私があります。日文で学ぶみなさんには、「ことば」が我々の生活に欠かせないツールであると同時に、人生を豊かにしてくれるものであることを実感できる瞬間を迎えてほしいと思います。身近にあるがゆえに普段は意識することがないかもしれませんが、生きていく中で不意に思い知らされることがあるのです。

（北洋大学講師、2018 年度卒）

## 清水　咲彩

私は今、新聞記者として働いています。取材分野は警察や司法、街の話題…と幅広く、日々各地を駆け回っています。

学生時代は、友人たちと深夜まで文学作品について語り合ったり、夏休みに姉妹校の韓国・祥明大学校の短期研修に参加し現地の学生と交流したりと、人生がとても豊かになった４年間でした。

日文での学びを通し、〈忍耐強く資料や文献などに向き合うこと〉が大切だということを学びました。卒業論文の執筆を進める中、作者について理解し作品の解釈において自分なりの見立てを示すために、複数の文献に触れます。地道で酷な作業でしたが、振り返ると作者の人生観やテーマに迫るには必要な過程だったんだと考えています。

記者の仕事も同じです。事件発生後、その背景を追うため、現場を何時間も歩いたり、多くの関係者に会って話しを聞いたり、多くの資料に触れます。そんなとき、日文で培った忍耐強さが仕事に生かされていると感じます。

皆さんの中には、ここでの学びがどのように社会で生きるのか、疑問を持つ方もいるでしょう。しかし、４年間で自分なりの答えが見つかるはずです。日文での学びが皆さんにとって、実りのある時間になることを祈っています。

（熊本日日新聞社勤務、2020 年度卒）

発 行 所：熊本県立大学文学部日本語日本文学科
表紙題字：西村あかね（本学科卒業生）
発 行 日：2025 年６月 10 日